

# Accounting, Arithmetic & Art Journal



NO. 26

The **P**ACIOLI **S**OCIETY **J**APAN

2013. 05

## ◆ 片岡先生 本会顧問にお迎え

このたびパチョーリ協会顧問に片岡泰彦先生の就任をお願いし、快諾をいただきました。ご承知のようにパチョーリの研究はもとより、イタリア会計史、ドイツ会計史のみならず日本の簿記史や会計理論研究の業績は世界的に知られています。片岡顧問のもと、本会のさらなる発展が期待されています。

## ◆ 中小企業会計学会の発足

中小企業の経理担当者が待望していた「中小企業の会計に関する基本要領」(以下「会計要領」)は中小企業庁、金融庁、そして経理関連民間諸団体が協力して纏め上げ、2012年2月に公表されました。この「会計要領」に従って、中小零細企業の身の丈にあった、そして使い勝手の良い会計慣行が形成されることが望まれています。

なお、この「会計要領」の普及を図るため、日本商工会議所は「商工会議書簿記検定試験出題区分表の改訂について」(2012年2月)と題して、簿記検定試験の出題項目「会計基準及び企業会計に関する法令等」にこの要領を追加しました。

本要領構築を啓蒙されてきた武田隆二神戸大学名誉教授が2009年2月に亡くなりましたが、先生の遺志を実現すべく、身を粉にして関係諸団体との調整に努められた河崎照行甲南大学教授の掛け声で、2013年2月16日に「中小企業会計学会」の創立総会が甲南大学会計大学院で開かれました。

本学会は「中小企業会計の研究及びその普及のため、中小企業会計の研究及び実務に携わる者の連絡及び懇親を図ること」を目的(会則第2条)に設立されました。発起人52人のうち当日全国から駆けつけた33名により、設立にかかわる手続き並びにこれに続く懇親会が無事終了いたしました。

第一回の全国大会は本年9月初旬に同大学を会場に開催が予定されています。この学会が260万中小・零細法人の健全な会計慣行構築の礎となることを願う次第です。

## イコノロジー (Iconology)

絵画の中に描かれた作者の意図や寓意を読み取ろうとする学問分野を図像学 (iconography) という。絵画が他の史料と異なるところは、視覚に訴える手段でもって、写真のようにその時を封じ込め、さらには画家と絵画の注文主の意図が塗り込められたタイムカプセルでもある。美術史は絵画がもつ構想の主題を特定することが重要である。この絵画とテキスト (意味的なつながり) の関連づけの仕事を図像学という。既知のデータから出発し、その作品を成立させている諸々の因子、つまり歴史的・社会的・文化史的因子を総合的に再構成し、その作品のもつ本質的な意味 (作者の意図や寓意) を探索することをイコノロジー (Iconology: 図像解釈学) とも呼んでいます<sup>1)</sup>。

## はじめに

いかにも好色そうな老人が 魅惑的な中年女性の頭に右手を置き、その左手は彼女の乳房をまさぐる。女性もそれにこたえるかのように男の顎をなでている。女の左手は男から抜き取った財布を後ろに隠れている悪がしそうな道化に手渡してる。

この絵 (1522-23 年頃) のタイトルは「不道德なカップル」または「不釣り合いのカップル」と題されています。



1492 年にコロンブスが新大陸を発見し、この大陸から大量の銀がヨーロッパに流入したことから、この絵が描かれた 16 世紀の前半には、貨幣に対する庶民の意識 (愛・色と金) に変化がもたらされた時代です。

## マセイスの「両替商とその妻」

「不釣り合いのカップル」同様に次の絵画もフランドル (現在のベルギー) 出身のクエンティン・マセイス Quentin Massys (1465~1530) が描いた、The Banker (or Money-Changer) and his wife, 1514, (Musée du Louvre, Paris) と題する代表作です。

ルーヴェンに生れ、アントワープに過ごしたクエンティン・マセイスのこの絵 (70cm cm × 67 cm) のモチーフは、庶民の仕事場風景です。芸術が庶民の手の届くところへ、すなわち、政治家、軍人、宗教家、そして画家のパトロンだけではなくして、ルネサンスを境に小銭をためた卑しい商人層であっても金さえ積めば、画家に肖像画を書かせることができる時世となったことを現した代表的世俗画です。

この絵は16世紀初期のフランドルの両替商の屋内を描いて、「両替商の妻(右手小指に指輪が見える)は、まるで時祷書の言葉や聖母子の挿絵より現世の財物に注意を奪われているように見え、そこに道徳的批判の精神を読み取ることができる」<sup>2)</sup>とされています。そして、カウンターの上で無心に天秤(法と正義)でコインを計測(通貨に対する信頼性)する夫が俗を、夫の行為を夢中になって(ないしは冷たく)見つめる妻が聖で、丸い凸面鏡に映る十字架の形をした窓とその外に見える教会の尖塔を背にした赤いターバン姿の人物



ルーブルの「両替商とその妻」

(作者となる画家)と、右手奥の戸外でおしゃべりに興じる男二人の姿が俗と聖の対照を繰り返している。

背景の戸棚には会計簿を思わせる書物(その上の皮表紙には「画家クエンティン・マセイス 1514」の署名がある)や蝋燭立て(はかない人生)、筆ケース、秤(正義あるいは最後の審判)、フラスコ、リンゴ(原罪)、銀の皿(キリストの贖罪)、そして鏡に「賢明」、「真実」あるいは「虚栄」というように象徴的な意味(寓意)を読み取ることができる。

緑色の上品なカウンターcounterは両替商の商売道具である。中世の商人たちにとっては、算板派の算術(アラビア数字が盛んになると筆算派が台頭)が華やかなころの計算には計算台(計算板)が必需品でした。その台の上には散らばる金貨のほかに、ガラス製蓋付杯や真珠(真実)、手前に入れ子分銅のケース、奥に大きさの異なる分銅の数々、指輪をとめた串などなどが細密に描かれている。

マセイスの父の作(1520年?)とされる男女の配置が左右逆のヴァージョン(ベルリン国立博物館)には時祷書はなく、帳簿をめくる女性に変貌(指輪は消失)している。聖なるものを象徴していた品々も画面から消える。この絵を紹介したエーリカ・ウイツは「金融業の妻が業務に精通して帳をつける」<sup>3)</sup>と寸評している。



ベルリンの「両替商とその妻」



ヒテンシュタインの「二人の徴税使」

このベルリンのバージョンから考えるに、1514年の初出にあっても、マセイスは帳簿をつける女性を意識していた、ないし事実、簿記方は妻であったのではあるまいか。

マセイスの構図でさらに有名な作品がスイスのリヒテンシュタイン美術館にある「二人の徴税使」です。帳簿をつける徴税使とその同僚とも思しき、ごうつくばりの人物、棚にははかない人生を表す蠟燭があり、封蝋されて書類が散らばり、棚に吊るされた鋏が契約と人情を切り裂くことを暗示しているようにも見えます。

## ファン・レイメルヴァーレの「銀行家とその妻」



ブラドの「銀行家とその妻」(反転)

マセイスのモチーフを引き継ぐのが Marinus van Reymerswaele (1497~1567) のミュンヘン Alte Pinakothek にある 1538 年の作品 (67 cm×103 cm) とスペインのプラド美術館に展示される 1539 年の作品 (83 cm×97 cm No. 2567) には 16 世紀の銀行家や投資家用の風変わりな帽子 (社会的地位を著すものであろう) を被り、そして妻とコインの計測をする絵画「…とその妻」がある。労働を知らない妻の細い指や帳簿をめくる妻の視線はマセイスと同じ構図ではあるが、B. S. ヤーメイによればマセイスの絵と決定的な相違は諷刺性とグロテスクにあるという<sup>4)</sup>。



ミュンヘンの「銀行家とその妻」

このシリーズの原画を初めて見たのは 1992 年のプラドでした。その時は絵葉書を購入するチャンスを失いましたが、その後同美術館が発行したスライドを見たところ、驚いたことに男と女の位置が反転していたのです。このような例はまれなことではなく、その後このような誤って反転した写真を幾度か経験しました。

なお、レイメルスヴァーレの作品にはそのグロテスクをより強調した一連の「二人の徴税吏」(Two Tax Gatherers)があります。とくに有名なのは National Gallery, London (97×74.6 cm) にあるものです。



ロンドンの「二人の徴税使」

これは老齢の男(画面に向かって左手)が開いた帳簿にペンで記録し、その男に寄りそうようにグロテスクな形相の中年の男が卑しげに口を開いて話し掛けている、後ろの戸棚に蝋燭立てが置かれて人生のはかなさのアレゴリーを強調している。余談ですが、2007年にルーブル美術館でマセイスの「両替商とその妻」を鑑賞した折、同じ部屋の別の壁にレイメルスヴァーレの「二人の徴税使」が飾られていて、この粋な美術館の計らいに感心しました。

昨年一人で北欧を旅した折、ベルリンの博物館島にある Bode-Museum を訪れ、レイメルスヴァーレの別の「二人の徴税使」をみましたが、この種のシリーズはヨーロッパ各地の美術館に点在しています。

## 社会的背景

当時の金持ちや商人を社会はあまり好意的に見ていませんでした。『集会の書』もしくは『ペン・シラの知恵』とも呼ばれる『シラ書』31:5-6に「黄金を愛する者は正しい者になれず、金銭を追い求める者は金銭で道を踏み外す。黄金がもとで多くの者が身を滅ぼした」とあり、また、死を前にモーセが説話したとされる『申命記』23:19-20には「(キリスト教の)兄弟に利息を取って貸してはならない。金銭の利息、食べ物の利息などすべて貸して利息の付くものは利息を取ってはならない。外国にいる兄弟を除き、外国人には利息を取って貸してもよい」という掟があった。それゆえ金融や両替に従事する者は卑しい職種とされ、絵画の対象ではなかった。特に金がそれ以上の金を産む利子、すなわち神が管理する時間を利用する(同胞に対する)高利貸などはイスラム<sup>⑥</sup>においてもキリストのもとでも認められなかった。ユダヤ(教徒)の高利貸しが中世の金融を支配していたのはこれが背景にあります。

思い出すのはシェイクスピアが1590年代に書いたあの『ヴェニス商人』です。商人であるアントーニオ(友人のために金策に走る)にユダヤ人高利貸シヤイロックが融資をし、期日までに返済ができなかった場合の違背金の契約をしています。貸した金に対する利息や延滞金を回避するため、アントーニオのからだの一部を切り取って違約金とした話です。

その後時代は貨幣を基礎とする資本主義経済社会となり、中世の宗教的戒めの感覚は失せて行きます。17世紀のファン・フォルネンベルグが報告するところによるとマセイスの1514年の「両替商とその妻」の絵画には'Just balance, just weights, …… shall ye have'. 「汝、正しい天秤、正しい重りを用いるべし」という、画家自身が選んだと思われる『レビ記』19:35-36からのことばが刻まれていたといえます。となると画家は両替商の美人「伴侶」に興味があったわけではなく、金銭を扱う職業の卑しさや下品な計測行為が目的だったのでしょうか。ファン・レイメルヴァーレの描く両替商ないしは銀行家の構図が各地に残っているのは、

おそらく、高利貸しと同類に見られた両替商のギルドハウスに掲げられて、正義を体現する正しい天秤と信仰を訴えるために注文されたのではなからうか、と元木幸一は結論付け<sup>8)</sup>ています。

## ハウスキーパーか、ブックキーパーか

歴史 History を学ぶ際には、対象となる事件が起きた背景を知らずして、目の資(史)料だけで事実を解釈すると大きな間違いを犯すことがあります。できるだけ当時の社会経済的、技術的背景を把握して、地理的状況、気候、社会統計資料など、医学史にあっては疫病の流行や当時の衛生状態、人口統計、出生率、死亡率などを踏まえて story を綴ることが大切です。写真と同様に時代を写し取った絵画を分析することで、時代を読み取れば有望な論証となります。



セントルイス美術館の玄関正面の装飾壁に掛かるオランダ人画家 Nicolaes Maes(1634~1693)の「家政婦 housekeeper」(1656年)は最近「帳簿係 (bookkeeper or Account keeper)」と標名を変更したそうです。眼鏡を掛けた老齢の婦人が机に向かい、思案げに帳簿をつけている構図です。机の上の2冊の帳簿の1冊にペンで書き入れながら途中で、左腕で頬杖をついて居眠りをしている。婦人の背後の壁には西半球と東半球を別々に模った大きな地図が垂れ下がり、その左隣りに円形の小さな額が掛かっている。額には結婚の神であり、商業の神でもあるユノーの胸像(Juno)がレリーフされている。

### セントルイスの「帳簿係」

世界地図や商業神のアレゴリーを考慮すると、画家はこの女性のしぐさに家政簿を付ける構図を意識したのではなく、おそらく貿易を営む夫に代わって事業簿を付け、夫不在の倦怠的な雰囲気醸したものと思えます。また、意味ありげに壁に鍵がつりさげられています。画家は貞節や家の管理を強調したかったのかもしれませんが。

これまで見てきた「…その妻」シリーズから、夫の会計業務の一端を担う女性が16-17世紀オランダでは一般的であったことが理解できるでしょう<sup>9)</sup>。

ヨーロッパは12世紀半ばころになると商業を営む上で読み書きの知識は必要不可欠なものでしたから、庶民の子弟のために世俗学校が作られ、聖職者や貴族階級の者だけが読み書きを独占するものではなくなっていました<sup>10)</sup>。ジョヴァンニ・ヴィツラーニの年代記(G. Villani, *Cronica*, X I p.94.)によれば1338年のフィレンツェには、「8千ないし1万の男女児が学校で読み方を習い、千人ないし千二百人の男子が6つの学校で簿記(abbaco)や算数(algorismo)を学んでいる」<sup>11)</sup>と語っています。これらの実業課程を卒業すると、信用売買、委託売買、手形決済、

利益の配分を確実に記録する会計簿をつけることができた<sup>12)</sup>と言います。中世の「女性史」に詳しいエーリカ・ウイツはその著『中世都市の女性たち』の中で、当時を次のように描いている<sup>13)</sup>。

一般にはじめて結婚する娘は、夫の商売を分担するには若すぎて経験不足である。若い妻は夫から教わったり、夫の留守に家族から家の利益を守る必要を教わる。彼女が最初の夫を亡くしたときには、商売に必要な経験を身につけて再婚した。夫が年をとってから商売をつづけるのに妻の助力が役立ったり、必要なら主人の代理を努め、場合によって資産のない親戚を従業員にして商売をつづけるほど目が利くこともあった。

1494年のルカ・パチョーリの著書にすでに帳簿記入面の女性の役割を控え目にではあるが認めていたと B. S. ヤーメイは述べています<sup>14)</sup>。すなわち、商人や帳簿係が不在であっても、取引の場面に居合わせたものが誰でも日記帳や雑記帳に詳細を記述しておけばその後簿記知識をもつものが仕訳帳に取引を復元できる、と。

『各種商業を営む簿記に関する確実な形式云々 (*Den stijl von boekhouden inhoudente versheyde negotien...1603*)』の著者ヤン・カウテレルースは「備忘録は商人や簿記係が不在のときに、妻子や男女使用人が借方・貸方に分別せずにすべての取引について未整理のまま記録できる有用な帳簿である」と述べている。

時代が少々下った英国について、B. S. ヤーメイが別の紹介をしている。1692年初版のジョシア・チャイルド卿(東インド会社社長)の『商業新講話(*A New Discourse of trade, Wherein is recommended several weighty points relating to companies of merchants.* by Sir Josiah Child, London)』の中で、オランダの男の子も女の子も算術と商業計算についての十分な知識と技術を教育されていて、「女性は夫の財産について知識を身に付け、夫の亡き後にその商売を管理できる(妻の)能力を知る夫を励まし、臨終の時まで夫に商売を続けさせる」と書いている。そして、チャイルド卿は「一方英国では、老後を迎える前に商売を売却して財産を得る。さもないと海外に投資している財産は商人が亡くなると、妻の無経験と不適應により3分の1を失うに違いない」と嘆いている。それから30年後のダニエル・デフォー<sup>15)</sup>も英国の小商人の妻たちが夫の仕事を下げずみ、その妻であったことを恥じて、寡婦となったときには店を守ろうとはしなかった、と酷評しています。さて、読者は歴史に埋もれた女性の生きざまをどのようにお考えになりますか。

#### <注>

- 1) 若桑みどり著『絵画を読む』(日本放送出版協会 1983)p.15。
- 2) 朝日新聞社編・新畑泰秀稿『絵画の見どころ読みどころ・16世紀ルネサンス絵画』(朝日新聞社 1992)p.85。
- 3) 高津春久訳/エーリカ・ウイツ著『中世都市の女性たち』(講談社 1993)
- 4) Basil S.Yamey, *"Art and Accounting"*, London, 1989.p.49.
- 5) 新畑泰秀稿『上掲書』 p.85 参照。
- 6) イスラムの教義 Shariah では、ものを売り利益を得ることは許されている。これは人間が生活する上で必要だからである。しかし、リバー(利息)は損得のリスクをとまわらない金の融通だけで得た利益(不労所得)である。コーラン 2:276「アッラーは、商売はお許しになった、だが利息取りは禁じ給うた」という。イスラムの商いの原則は人為的に値段の操作のない「等価交換」にある。

- 7) 金銭貸借の返済遅延に伴う利子は、「期待利益の喪失」であつて、聖書が禁ずる消費貸借とは異なるという理由で、ルネサンス早期に少しずつ肯定されるようになった。
- 8) 元木幸一稿「正しい天秤、正しい重り—クエンティン・マセイス、『両替商とその妻』の意味と機能—」山形大学大学院紀要文化システム研究科紀要 創刊号(2005.3)p.79 参照。
- 9) Basil S.Yamey, “*Ibid*” p.50.
- 10) 清水廣一郎著『中世イタリア商人の世界』(平凡社 1982)p.22.
- 11) G.Villani,*Cronica con lecontinuzioni de Matteo e Filippo.Scelta,introduzione e Note* di G.Aquilecchia,Torino 1979, XI,p.94.  
佐田玄治訳/カルロ M.チポラ著『読み書きの社会史』(御茶の水書房 1983) p.32.  
(*Carlo M.Cipolla,Literacy and Development in the West,1969*)
- 12) 山本淳一訳/フェルナン・ブローテル著『物質文明・経済・資本主義—交換のはたらき 2—』(みすず書房 1995)p.146 参照。
- 13) 高津春久訳/エーリカ・ウイツ著『中世都市の女性たち』(講談社 1993)p.66.
- 14) Basil S.Yamey, “*Ibid*” p.101 参照。
- 15) Daniel Defore,*The Complete English Tradesman*,London,1726,p.348.



コペンハーゲンの NYHAVN の運河 (2012.8.11 撮影)

The **MACIOLI** **SOCIETY** **JAPAN**

日本パチョーリ協会 〒112 東京都文京区小日向3-4-14 拓殖大学 商学部 三代川 研究室  
The Institute for Management and Accounting/Takushoku Univ. Miyokawa Office

TEL. 03-3947-2261  
FAX. 03-3947-5333